

私の本棚には武智秀夫, 明石謙共著の義肢装具の本が10冊近く並んでいる。もっとも古いのは1968年初版の“義足”であり, 岡山大児玉教授の監修, 岡山大講師の武智・明石の共著になっていた。その後, 1969年の“装具”, 1972年の“義手”が続いて出版された。これら3冊の初版が出版された頃は, 義肢装具学の日本語の単行本がなく, 理学療法士養成校の義肢装具学を担当していた私も, 自分でテキストを作って学生に配布していたので, 早速教科書として使わせてもらい大いに助かった記憶がある。その後3冊の本は増刷と改版を重ねて, 1991年には“義足”と“義手”が1冊にまとめられて“義肢”になり, 今回“装具”第3版が出版された。このように共著者による複数の本が30年近くにわたって版を重ねることはわが国では珍しいことであり, 本シリーズの価値を示す何よりもの証拠であろう。現在の日本義肢装具学会の前身である義肢装具研究同好会の発足が1968年であるから, これら3冊の本は文字通り日本の義肢装具学の発展とともに歩んできたと言っても過言ではない。

本書の構成は, 装具の歴史, 概念と機能, 材料, 工具と機械, 計測, 分類, 下肢装具, 靴, 体幹装具, 上肢装具, 坐位保持装置, つえと歩行器, 車椅子, 適合判定, 給付制度と処方と, 文字通り装具とその周辺領域を完全にカバーしている。歴史は武智先生の得意分野であり, 装具の歴史における重要人物の紹介を交えながら語られる装具の発展の歴史はまさに武智先生の独壇場である。装具の概念と機能から, 材料, 工具と機械, 計測, 分類までの章は, 簡

潔に分かりやすく解説されているので, 初心者の装具の理解と診療現場の実務に役立つであろう。下肢装具の章では, 関節の動きから, 足変形の分類, 部品の解説, 各種プラスチック短下肢装具の紹介, さらに長下肢装具から治療用装具にいたるまで, ほとんどすべての下肢装具が網羅されている。靴, 体幹装具, 上肢装具の各章においても, リハビリテーション領域で使用するものから整形外科の治療用装具までを紹介し, 解説している。坐位保持装置やつえなどの歩行補助具, 車椅子などについても相当な頁が割かれている。装具の適合判定の章では一転して症例の写真を多用し, 実際の短下肢装具, 長下肢装具, 靴の実際的な適合チェックの方法が示されている。

今回の“装具”第3版の特徴は, 第2版までのバランスのよくとれた内容と分かりやすい説明の伝統を引継ぎ, さらに明快で分かりやすいイラストを増やして, いよいよ初心者にも取り付きやすい本となったことであろう。義肢装具に携わる医師, 理学療法士, 作業療法士, 義肢装具士の方々やその養成校の学生はもちろん, さらに看護婦やソーシャルワーカーなどの方々にも装具とは何か, どのような種類があるのか, その構造はどうなっているのか, どのようなときに処方するのか, 支給制度はどうなっているかを理解するのに役立つ本である。あえて私の希望を言わせてもらうならば, 現在の装具学の基礎を構成しているバイオメカニクスについての記述が加わるならば, さらに完全な装具学となるであろう。

(B5 頁180 5,150円(税込) 1996 医学書院刊)